

# 外崎 覚（とのさき・かく）

## 1、プロフィール

中泊町(旧中里町)生の漢文学者、史家。儒学者工藤他山の子。17才で太政大臣三条実美に「君民共治」(立憲君主)の建白書を提出。森鷗外と交流。作家平田小六は甥。

<生没>

1859(安政6)年6月21日～1932(昭7)年8月8日

<代表作>

『津軽信政公伝』『津軽信明公伝』『踏雲遊記』『雪の岩木嶺』『拙居詩文稿』『永懐録』『楠乃一葉』等。

<青森との関わり>

北津軽郡中里村(現中泊町)生まれ。弘前で白銀小(現朝陽小)や東奥義塾で教鞭を執る。

## 2、作家解説

外崎覚(工藤覚蔵)は郷土で熱心な教育者だった父工藤他山(1818～1889)が中里村に学塾を開いた頃の子で、外崎姓になったのは20才の時弘前に養子として外崎家を嗣いでからである。妹が後に平田家に嫁し、その三男が作家平田小六(1903～1976)である。覚の業績としては、若年で自由民権思想を基に太政大臣に立憲君主制の建言を結社に抛らず単独でしたこと、父の志を継ぎ郷土で教壇に立ったこと、永らく宮内省の諸陵寮に勤めたこと、父他山の業績をまとめたことなどが挙げられよう。三条に行った建言は「夫れ君民共治政体はは、君主上にありて万民を統轄し、公明正大の憲法を確定し、国民をして国事に参与せしむる」(明治8年)という当時としては進歩的なものであった。覚は文部省から宮内省に勤務するが、その間津軽藩の史学にも意を傾け『津軽信政公伝』等の著書を遺している。森鷗外と交流があったのはこの宮内省勤めの頃であつたらしく鷗外の小

説『渋江抽斎』に覚は実名で登場している。弘前藩医であり漢籍に通じ詩文にも秀でた渋江抽斎(名道純、1805～1858)の生涯に深い関心をそそられた鷗外が、覚に面談し渋江のことについて様々に質すのであるが、初面談の印象を「この人(覚)はわたくし(鷗外)と齡(よわい)も相(あい)若(し)くという位で、しかも史学を以て仕えている人である。わたくしは傾(けい)蓋(がい)故(ふる)きが如き念(おもい)(旧友のような親しい思い)をした。」と記、覚の生真面目で温和そうな性格をにじませている。小説の中で覚は渋江のことを鷗外にいろいろ教えてやり、書簡も送っている。事実、現在弘前市立図書館に覚自身が寄贈した筆写書簡集が蔵されており、覚自身の書簡に加え諸家の書簡の筆写も綴じられているのだが、その中に「陸軍々医総監森林太郎」の名も見える。(→関連資料)晩年には父他山の勲位に叙せられた際の報告書を刊行するなど、生涯父を尊崇し、その志を継がんと勉勵し続けた覚の気概が伝わる。弘前市立図書館は上記書の他にも覚の遺した著書、資料が多数保管され、一般者にも閲覧可能。

### 3、資料紹介

○『花のおもかげ上』

手書き 和綴じ本

1931(昭和6)年3月

23.3cm×15.6cm

外崎覚手書きの書簡集。扉に「外崎覚蒐録諸家書簡集」とあり、覚の書面のみでなく、覚宛の諸家の書簡を筆写したものを綴じたと思われる。特に巻末の近くに「陸軍々医森鷗外君」の書簡があり、格が鷗外に献呈した本の礼状と見られる。(弘前市立図書館蔵)